

## 講壇点滴

### 最高の道、愛

コリントの信徒への手紙Ⅰ

二一章三一b～一三章七節

牧師 姜 涇 米

一三章は「愛の賛歌」と呼ばれており、愛について集中的に語られています。一二章で語ってきたのは、霊的な賜物、聖霊の賜物についてでした。教会の一人ひとりに、それぞれ違った賜物が聖霊によつて与えられている、それらがあいまって、一つの「キリストの体」としての教会が成り立っているのだということが語られてきたのです。

そして様々な務めを果たすための賜物よりももっと大きな賜物がある、その「もっと大きな賜物」は「愛」です。熱心に求められるべき愛という賜物を、二二節後半の言葉をもつて語られていくのです。

この三一節後半に、「最高の道」に注目したいと思います。最高の賜物を教えます、ではなくて、最高の道と言われているのです。愛は、他の賜物と並ぶ一つの賜物ではなくて、「道」なのです。道というのは、そこを通して目的地に行けるものです。どんなにすばらしい賜物を持っていても、この道を通らなければ目的地には行けない、その賜物が生かされないのです。

一～三節が語っているのはそのことです。それぞれの節に、「愛がなければ」とあります。これは「わたしが愛を持っていないければ」という言葉です。愛を持っていないければ、どんなに優れた賜物を持っていても、何の役にも立たないと言われているのです。

パウロはこのように、愛こそが、あらゆる賜物が本当に生かされる道だと言っています。また、一見愛の行為と思われることが、実は愛なしになされることがあり得ることを指摘します。そこに、愛の重要さと、また難しさがあると言えるのです。その重要で、難しい愛とは、どのようなものなのか、四～七節に語られています。

最初に「愛は忍耐強い」とあり、愛するとは、相手のことを忍耐することだということです。私たちは愛するというと、自分の好きな人、気の合う人、友達を積極的に愛することとして考えがちですが、ここで教えられているのは、気に入らない相手、対立する相手に対する忍耐であり寛容なのです。

七節の、「忍び」と「耐える」を合わせれば「忍耐」です。はさまれて、「信じる」と「望む」があります。この「信じる」は神様を信じることでなく、相手を信頼し続けることであり、「望む」も神様に望みをかけるのではなくて相手との関係に希望を抱き続けることです。愛はそのように、相手のことを忍耐し、信頼し、希望を失わないことだと教えられているのです。それは聖霊によつて与えられる最高の賜物です。

パウロも、そして私たちも、この愛に生き方を知っています。それは主イエス・キリストです。ここに並べられていること一つ一つが、主イエス・キリストが私たちにしてくださったことです。主イエス・キリストは、神様に背く私たちに對してどこまでも忍耐強くあられ、神の子としてご自分の自由や権利を捨てて、私たちの罪を背負って十字架にかかって死んでくださいました。パウロも私たちも、この主イエス・キリストを通して神様の具体的な愛の中で生かされているのです。

(四月二四日 共同礼拝)